*The 20th annual meeting of the Japanese Inflammation Society organized by dermatologists
Hachiro Tagami**

皮膚科医が主宰する第20回炎症学会

田上 八朗*

第20回炎症学会は仙台で、皮膚科医である私がお世話させていただく。臨床科のなかでもマイナーな科であるだけでなく、皮膚という特殊臓器を対象に扱う科の人間が、炎症学会のようなすべての医学分野をカバーする会を世話することに、「あれ」と思われる人もおいでのことであろう。

しかし、もともと紀元1世紀、Celsusが発赤、腫脹、熱感、痛みの四つを特徴として記載した炎症の症状は、すべて日常で私たちが皮膚で見ている現象である。皮膚の炎症は人類にとって、もっともなじみのある現象であるので、皮膚という特殊臓器の臨床ならびに基礎の研究をしてきたものとしては、このような学会を主宰できるがことを慶ばしいこと、と感じている。

環境と直接に接する臓器の皮膚には、環境からの影響でしばしばいろいろな症状をもつ皮膚の炎症性疾患が生じてくる。実際、有史以来のさまざまな形の炎症性皮膚疾患につけられた記載病名は、洋の東西を問わず何百にも昇り、その複雑かつユニークな名称に一般人はもちろん、医学生や医師でも頭をひねることが多い。というより、皮膚科医でもなかなか覚えきれない名前までたくさんある。

一方、臨床家のなかでは、皮膚科医がある意味ではもっとも基礎医学的な分野と直接に接した仕事をしているともいえる。病理組織標本を採取し、診断に迫ろうとする皮膚科医はきわめて多い。もちろん皮膚科医のなかには、自分でさまざまな染色や免疫組織的な検索を試み、いろいろな炎症性疾患の炎症発症機序に迫ろうとしているものまでいて、日常的な診療に病理組織学が顔を出す分野でもある。というより、皮膚の病理組織学は皮膚科専門医に必須の診断技術である。さらにまた、開業したお医者さんが炎症の病変部から病原真菌を分離し菌の同定をするような臨床科も、まず皮膚科をおいてはないであろう。

皮膚を見ていると、炎症にともない臓器がどのような反応を示すかがつぶさに観察可能である。たとえ炎症がなくとも、それに備えるかのように表皮ではIL-1 α 、そのアンタゴニストとして炎症の調節にあたるIL-1 α RAやIL-8といった炎症性のサイ

* Department of Dermatology, Tohoku University School of Medicine
東北大学医学部皮膚科教室

トカインが常に一定量産生されており、表皮の最終産物である、垢の層である角層は IL-1 α の宝庫である。皮膚の細胞にひとたび炎症刺激あるいは炎症性サイトカインが作用すると、補体成分である C3 をはじめとして、IL-1, IL-6, IL-7, IL-8, IL-10, IL-12, TNF α といったサイトカイン、さらにプロスタグランジン、ロイコトリエン、PAF などの脂質伝達物質もたくさんつくられはじめる。

ということで、皮膚科医としては炎症学会にもっと皮膚科医の側からの参加を望みたい。さらに、20 回という回数は一種の節目にあたる。本学会が多くの専門分野の間での網を張り巡らす役割を本学会が果たし発展してきた意義はきわめて大きく、特に基礎医学と臨床医学とが創薬研究と手を取りつつ、相互に発展をみてきたことは他に類をみない学会の形態である。そこで、プログラム委員の先生がたのお知恵を拝借し、少々、会長としての意向を加えさせていただき、特別講演、教育講演では各分野にまたがる炎症の問題点に焦点をあて、シンポジウムやワークショップでは、基礎レベルの共通問題以外に各臓器の炎症を取り上げてもらうように企画した。そのため、歯周組織、消化器、上気道、呼吸器、眼組織、泌尿器、神経系、皮膚といったさまざまな臓器組織の炎症が取りあげられることになった。

この機会に、さらに炎症の研究が幅広い分野で十分に伸びる機運ができたらと、なるべくたくさんの方々への参加を期待している。